

---

## 原著論文

---

コミュニティ放送における災害の語り：

会話分析によるゲストとパーソナリティの相互行為

Talk of Disaster in Community Broadcasting: The Interaction between  
Guests and Personality by Conversation Analysis

キーワード：

コミュニティ放送, 災害, 放送トーク, 会話分析, 相互行為

keyword：

community broadcasting, disaster, broadcast talk, conversation analysis, interaction

情報科学芸術大学院大学 金山智子

Institute of Advanced Media Arts and Sciences Tomoko KANAYAMA

---

### 要約

本研究は放送トーク研究を理論的視座におき、コミュニティ放送の番組における被災者の語りについて、いかに語り手であるゲストと聞き手であるパーソナリティが相互に関係しながら被災や復興の語りを生成しているのかを明らかにすることを目的とする。2013年10月から2020年3月まで放送されたFMいわきの復興番組『ラジオのまなざし』を対象に、ゲストとパーソナリティのトークを会話分析した。その結果、(1)ゲストとパーソナリティの相互行為において、現在/未来に関する発話と、震災の記憶の発話では構造的現象に差異があること、(2)ゲストとパーソナリティの両者が主体的な関わりを維持しながら会話していること、そして(3)近接性をもつ地元のリスナーの存在はパーソナリティの発話に影響与える、という3つの特徴が明らかになった。本研究は、コミュニティ放送を通して災害を語ることは、被災した地域の人たちが安心して語れる環境にあることを前提に、同じ被災経験をもつパーソナリティとの相互行為を通して、被災や復興の経験、複雑な想いや感情を、その時その場で共に紡いでいく行為であり、それを一つの物語として同じ体験や感情をもつ地元のリスナーと共有していくという、もう一つの行為であり、被災地のコミュニティ放送だからこそ、この二つの行為が実践されている

---

原稿受付：2022年3月23日

掲載決定：2022年10月26日

という知見を示した。

#### Abstract

This study takes a theoretical perspective on the broadcast talk studies and explores how the talk of disaster victims in community broadcasting are generated through interactions between the guests and the personality. The results of the conversation analysis of the programs broadcast from October 2013 to March 2020 revealed three characteristics: (1) there is a difference in structural phenomena between talks of present/future and talks about the disaster in terms of the interaction between the guests and personality, (2) the guests and personalities' proactive commitment to the conversation, and (3) the personality's talk that is conscious of the listeners' proximity to them. This study indicates that talking about disasters through community broadcasting is an act of weaving together the experiences of disaster and recovery, and complex thoughts and feelings, through interaction with personality who have the same experiences of the disaster, in an environment where people in the affected areas can talk about the disaster in safe. It is also another act of sharing the story with listeners who have the same experiences and feelings with the guests and personality. The community broadcasting in stricken area can be the place where both acts for local community members are implemented.

## 1 はじめに

被災体験を「語ること」は災厄から精神的に立ち直っていく上で、重要な役割を果たす。東日本大震災でも「語り」という行為は災害からのレジリエンス<sup>(1)</sup>となると報告された(結城, 2014)。Raphael (1986=1995)によれば、体験を具体的な言葉で表わし、他人が理解できるように自我を外面化する行為であるトーキングスルー<sup>(2)</sup>は、被害や精神的打撃を克服する一つの方法であり、ラジオなどメディアにおける語りもその一つとされる。他者に災害体験を語ることは、当事者に浄化をもたらすだけでなく、その体験をコミュニティで共有することは、「地域ぐるみの感情発散」(p.234)となる。ラジオを通した語りの共有は被災地のリスナーに向けた浄化作用をもたらすといえよう。

被災地のコミュニティ放送局や臨時災害放送局では、トーク番組、インタビュー、市民制作番組など、多様な番組フォーマットで被災者たちが語る機会が提供されている。Ong (1982=1997)は、声による語りはその場に居合わせた人との相互作用により創造されると述べており、語りは「聞き手と語り手の共同構築」(能智, 2006)なのである。したがって、コミュニティ放送の被災者たちの語りは、ある特定の時空間において、語り手である被災者と聞き手であるパーソナリティとが相互に関係し合うことによって生まれる。その語りはラジオというメディア・チャンネルを通して伝えられ、地域コミュニティのリスナーたちとの間に共有感覚を生むのである。

災害復興のプロセスは被災直後の愛他的で相互扶助的な反応を生む災害ハネムーン時期が過ぎると、物心両面での喪失や生活の激変、怒りや悲しみ、支援への不満・不安を派生させる幻滅時期へと移り、被災前の安定レベルに戻るまでに長時間を要する(Raphael, 1986=1995)。東日本大震災でも、全国からのボランティアなどによる利他

的な活動が注目されたが、時間経過に伴い、被災者間あるいは地域間のさまざまな差異や格差が顕著となり、コミュニティの中で多くの分断が生まれた。この中で、コミュニティの復興のためにどのような声を伝えていくべきか、コミュニティ放送局は悩みながら、伝えるべき語りを生成している(金山・小川, 2020)。

復興後は、災害あるいは災間として、災害の記憶を継承することが求められる。被災地のコミュニティ放送では、その時々でコミュニティや時代に合わせた番組形態を通して、災害の記憶が伝えられる(金山, 2020)。

これまでのコミュニティ放送研究では、被災者の声を伝える媒体としての役割と意義に焦点が当てられてきた(災害とコミュニティラジオ研究会, 2014; 大内, 2018; 金山, 2021)。その根底には、被災者の思いや体験は「伝えられるべきもの」との考えがあり、被災者自身の語りそのものが重視されている。他方、先の考えに基づけば、被災者たちの語りは、被災者とパーソナリティとの相互行為により生成されるものであり、コミュニティ放送を通して震災の経験の何がどのように語られるかの理解も必要となる。

本研究では、コミュニティ放送のトーク番組における被災者の語りについて、被災者であるゲストと聞き手であるパーソナリティが相互に関係しながら、被災や復興の語りをいかに生成しているのかを明らかにする。

## 2 放送トーク研究とコミュニティ放送

### 2.1 放送トーク研究とは

「トーク」は「日々の生活の場で交わされるカジュアルな会話のやり取り」と定義される(Giddens, 1987, p.99)。元来、トークは、言語・非言語という記号を用いた、ある秩序をもった相互作用である(Hutchby, 2006, p.24)。ニュース、ドラマ、エンターテインメント、ドキュメンタ

リーなどの放送活動で、「トーク」は基本であり、その普遍性ゆえに、メディア分析においては殆ど注目されてこなかった。Hutchby (2006) は、メディア研究において話すという行為が些細な日常実践だとして軽視されてきたことを問題視した。放送トーク研究の発展は、単なる「しゃべり」ではなく、日常的な会話の側面を、放送の談話の中に持ち込み、放送という制度的文脈に応じて変換したものと認識するところから始まり、番組を構成する形式的な言説構造の議論がこれを支えている (Scannell, 1989)。

放送トーク自体、参加の枠組みやしゃべりの動態をもっており、それは視聴者に向けた伝達の中で作用しながら形づくられる。伝達された放送トークは、公共の談話として視聴者に受容される。放送トークは、ディスカッションやインタビューなど参加者間のコミュニケーションによる相互作用であると同時に、そこに不在の視聴者にきかれる設計に基づく「構造の二重性 (double articulation)」を保持している (Scannell, 1991, p.1)。よって、放送トーク研究ではコミュニケーションの意図が番組の形式と内容においてどう組織されているかを明らかにすることが主目的となる (Hutchby, 2006)。

放送トークを特徴的に定義づけるものとして、(1) 日常会話の構造やパターン、(2) 制度的な言説形式トーク、(3) 視聴者のために作られたトークの3点が挙げられる (Hutchby, 2003)。コミュニティ放送における放送トークは、地域情報番組、市民パーソナリティによる番組など、日常会話の構造をもつ番組に多く発生し、それらはラジオ放送局の番組形態や言説形式の中に維持される (VanVuuren, 2006)。コミュニティ放送の受け手であるリスナーは、地域コミュニティの成員であり、リスナーの利益＝コミュニティの利益として位置付けられる。

放送メディアの中でもラジオは送り手と受け手の相互作用が高く (小川, 2009; 竹山, 2002;

藤竹, 2009)、番組の中でリスナーと電話で話をする電話イン、リスナー参加型のトーク番組、リスナーのリクエストによる音楽番組など、多様なジャンルをもつことから、リスナーとのトークが重要な要素となる (Stachyra, 2014)。コミュニティ放送にとって、地域コミュニティの成員の参加は、局の存在意義に関わり、成員であるリスナーとの相互作用は放送プログラム全体を通して局で最も重視される (稲垣, 2017)。先に述べた放送トークの構造の二重性は、番組参加者間、パーソナリティとリスナー間のそれぞれで相互作用が生じる。コミュニティ放送では市民パーソナリティや市民制作番組が多く、市民同士の相互作用で生成された話を、番組を通して市民がきくという構図で出来上がっており、これがコミュニティ放送におけるトークの特徴として捉えることができる。

一般的に、全国ネットワーク局や県域放送局などでは聞き手であるパーソナリティと語り手であるゲストは地理的あるいは社会文化的に離れており、両者間の近接性は低い。一方、コミュニティ放送では、ゲストの多くが地域コミュニティのメンバーであり、パーソナリティとゲストは地理的かつ社会文化的な近接関係があることから、様々な文脈共有が可能である。

コミュニティ放送局の多くは、地域コミュニティにスタジオを構え、パーソナリティやゲストが密接した状況で番組を制作する。街中のサテライトスタジオや、商店街やショッピングセンター、学校や役場など、馴染みのある場所での取材は、住民たちの身近で収録されることも多く、制作環境が相互作用に影響していると考えられる。

コミュニティ放送の番組で災害の経験について語る際、ゲストとパーソナリティ、語る環境との近接性、リスナーとの関係、文脈の共通性など、相互関係が多面的かつ同時発生することが想定され、こういった多重相互作用についてコミュニティ放送のトーク研究の文脈で理解することが求められる。

## 2.2 放送トーク研究と会話分析

放送トーク研究では、主な調査法として会話分析が用いられてきたが、これは「会話者自身が会話をしている中で、作り出し、利用する、秩序性を判別し、定式化しようとする、経験的分析」である(檜村, 1996, p.148)。檜村(2001)は、単に方法論というより『『話すという人間の活動』が、複数の会話者の間の、微妙に調整された記号の交換行為であるという考え方』(p.151)に依拠しているとする。

好井(2001)は、会話分析は「場面や状況を自明視したり、前もって存在するものとしては扱わない。そうではなく、それは、ほんらい(原文ママ)ローカルなその場その時ごとにうみだされ(原文ママ)、つくりかえられ(原文ママ)得る現象としてあつかわれる」(p.38)と強調する。Goffman(1981)も、会話の参加者は互いの関係を位置づけ、刻々と変化させながら相互行為を実現させると述べている。これに基づけば、被災者の語りは、被災当事者が話すものではなく、コミュニティ放送という地域コミュニティ向けの番組での会話を通して、「被災者として、この地域コミュニティをいま、生きていること」として経験的に表示しつつ、複数の場面における相互作用の実践によって達成されていると解釈することができる。

放送トークのコンテンツの焦点は、「パーソナリティ、局のスタッフ、そして視聴者自身の日常生活の小さな変化」(Montgomery, 1986)である。視聴者への持続的な直接話法が日常会話の感覚を持続させることから、ラジオ制作ではリスナーとの会話形成が重視される。放送トークにおいて、パーソナリティとリスナーの間に社会的上下関係や親しみなど社会的直感が生まれ、挨拶や修辭的な質問などを通じた対話の中で実現される(Tolson, 2006)。例えば、「こんにちは、ようこそ」という表現は通常の日常会話では「こんにちは」などの返答を必要とするが、番組冒頭でこ

れを使うことで番組ホストはリスナーとの擬似的な対話を開始する。リスナーが挨拶に回答することはないが、このように反応を必要とする発話によって直接的な関わりが確立され、リスナーが談話の一部であることが暗示される(Montgomery, 1986)。

放送トークの会話分析では、トークと相互作用の逐次的な組織化に焦点が当てられ、会話の順番取りとその構造的現象(隣接関係のペア、オーバーラップ、修復など)が分析の中心となる。放送においてトークの順番はコントロールされており、参加者は「質問する」と「答える」を交互に行なっていく。

ラジオ放送のトークでは音声メディアの特性が顕著となる。例えば、DJトークでは、DJは話している場所をリスナーに説明するため常にスタジオを参照し(Montgomery, 1986)、スポーツや式典など、ライブイベントの取材では見えない部分をレポーターが詳細に説明する(南, 2000)。

ラジオのトークは一般的な会話に比べて、発話の重複が少なく、また発話途中で重複した言いさし<sup>(3)</sup>が多くなり、聴覚による情報伝達で重複を避ける傾向がみられる(荒畑他, 2017)。ラジオのトークに共通の傾向は存在するが、形式やジャンルによってトークの内容は異なる。同じ震災の語りでも形式やトークの内容により相違が発生すると考えられる。

## 2.3 語り手と聞き手による共同生成

語りには、特定の出来事(例「あのとき、あそこ」)についての表現と、表現した時点(例「今・ここ」)における出来事への評価(例「今も忘れない」)が含まれる(能智, 2006)。語り手の「今・ここ」の行為においては、話をきく相手を意識しており、当然語りという言語活動に影響する。鷲田(2016)は、体験を共有していない他者に分かるように語る上で、他者という立会人が必要であり、その人が「相づちを打つことで〈語り〉が

起動する瞬間を支えるのである」(pp.183-184)と述べている。語りとは、「特定の時と場所において特定の聞き手を前に行われる〈こと〉」であり、「聞き手と語り手が相互に関係し合う場」(能智, 2006, p.52)であり、相手に話をきく聞き手と、それに応える語り手の両者によって共同生成されるものである。

ラジオのトークにおける被災者の語りは、聞き手のパーソナリティとの間で共同生成されたものであり、かつ、リスナーという別の聴取者の存在も共同生成において何らかの役割を果たしていると考えられる。

放送トークの会話分析は、これまでマス・メディアを主な対象としており、コミュニティ放送などのコミュニティ・メディアやオルタナティブ・メディアは対象にされてこなかった。市民パーソナリティや市民によるトークなど一般の人たちによるメディア発信が普及した環境においては、「誰が発言するのか」だけでなく、「誰が何のためにきているのか」が問われるとBurgess (2006, p.203)は指摘する。語ること自体の意義が強調されてきたコミュニティ放送においても、語りの生成に不可欠なリスナーとの相互作用が問われている。

### 3 研究課題と調査方法

#### 3.1 研究課題

本研究では放送トーク研究を理論的視座とし、コミュニティ放送の番組における被災者のトークを、単に被災当事者の語りとしてではなく、同じ地域社会や文化を共有している被災者(語り手)とパーソナリティ(聞き手)が、共に地域の災害経験者として、特定のローカルや文脈において相互行為しながら生成したものとして捉える。その上で、本研究では以下3つの研究課題を設定した。

RQ1: ゲスト(語り手)とパーソナリティ(聞き手)の相互行為により震災の語りは

どのように構造化されているか

RQ2: ゲスト(語り手)とパーソナリティ(聞き手)の近接性は、相互行為にどのように関係しているのか

RQ3: リスナーは語りの生成にどのように関係しているのか

#### 3.2 調査方法

本研究では、東日本大震災の被災地にあるコミュニティ放送局の復興番組を対象とする。震災直後から、コミュニティ放送局は災害復旧・復興番組を放送していたが、5年目頃から復興情報は徐々に情報番組やニュースとして扱われるようになり、復興番組が激減した。本研究は、長期化する復興における日常的な会話としての災害の語りを重視し、対象を長期的に放送されている復興番組とした。

2020年3月時点で放送されていた復興番組は岩手・宮城・福島県の3県合わせて3番組だった。この内、みやこハーバーラジオ(岩手県宮古市)の『復興のつち音』は毎週放送される番組(28分)で、スタジオまたはゲストの関連場所でゲスト(1名~数名)にパーソナリティがインタビューを行う。FMたいはく(宮城県仙台市)の『3.11から震災特別番組』は、2011年7月11日から月命日に放送する番組(58分)で、代表取締役の野田紀子がゲストに話をきく。FMいわき(福島県いわき市)の『ラジオのまなざし』は、復興に向け活動する人たちを毎月紹介する55分番組で、パーソナリティがゲストの関連場所を訪れ、そこで話をきく。どの番組も被災者や復興関係者が復興とともに災害経験を語る。分析対象の選出にあたり、以下の3点を重視した。

- ① ゲストとパーソナリティの関係性がトークに影響することから毎回異なるゲストが出演していること、
- ② 語りの構造を分析するに十分なトークが生成

- されていること、  
③番組構成や内容の変化が少ないこと

その結果、FMいわきの『ラジオのまなざし』が分析対象として選出された<sup>(5)</sup>。

調査では2013年10月から2020年3月までに放送された『ラジオのまなざし』の番組アーカイブ77本を全て試聴した<sup>(6)</sup>。2016年までは、ほぼ全ての回に災害の語りが含まれていたが、2017年以降は放送回の半分程度で災害の語りが含まれた。そこで分析対象には、災害や復興の語りが含まれないもの、特別編成、イベント収録、そして再放送の放送回を除いた51本とした。また、放送回によって災害の語りの分量にもかなり差異がみられた。番組は現在過去未来の3パートから構成されており、1回のトーク全体のうち3分の1以上で災害が語られている放送回を対象とした。その結果、20回分（2013～2016年は14回分、2017年以降は6回分）を対象に会話分析することとした。

番組は全て文字に起こし、会話分析用のトランスクリプトを作成し、次に各番組をききながら、記号を用いてトランスクリプションを行った<sup>(4)</sup>。また、この番組以前に放送されていた復興番組『越えてゆこう、明日へ』についても、アーカイブをきき、語りの変化をみる際の参考とした。

## 4 分析

### 4.1 番組オープニング

東日本大震災、そして福島第一原子力発電所事故に見舞われて、いわき市からマス・メディアが避難する中、FMいわきは市内に留まり、被災者や避難者へ災害情報を伝達し続けた。2011年4月18日には、東日本大震災復興特別番組『越えてゆこう、明日へ』の放送を開始、2012年5月27日まで105回放送した。最初の数か月では、復旧や避難所、捜索、医療、ボランティア、住宅支

援、自衛隊活動、経済支援などの活動、夏からは復興に向けての活動、12月以降は「震災を乗り越えて」や「復興への道」をテーマに関連の人から話をきき、最終回では、いわき市長をゲストに「いわきの未来」についてきいた。

番組の冒頭では、「この度、東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。この震災で、私たちは甚大な被害を受けました。しかし、諦めずに立ち上がり、復興に向け歩み出した人たちがいます。この番組ではそんな前に進みだした人たちをご紹介します」とナレーションが入り、その後復旧復興の状況説明、ゲスト紹介、そしてインタビューという構成となっていた。

本研究の分析対象である『ラジオのまなざし』は、この番組の後継番組として2013年10月に開始された。現在と未来にフォーカスし、復興に向けて活動する人たちを月1回55分番組で紹介する。ゲストは、農家や漁業従事者、商店主、まちづくり関係者、学生、復興プロジェクト関係者、アーティストなどさまざまであった。『越えてゆこう、明日へ』のパーソナリティメンバーだったベティが番組パーソナリティを務め、ゲストが関係する場所へパーソナリティが出向きトークする形を基本形としている。

この番組では、番組のオープニングに長めのナレーションが入り、被災した人々へのシンパシーが伝えられる(表1参照)。番組の開始時期は、災害ハネムーン時期が過ぎ、被災者間の復興格差が見えてくる時期と重なり、多様で複雑なリスナーの心情や感情を慮り、またそれらを、被災地の記録として残すという番組に込められた意図を示していた。ナレーションの最後では、「今と未来にクローズアップ」という言葉で、震災(過去)から前に進んでいる日々が強調される。番組の目的と同時に、震災経験を番組の中でどのように位置付けるかが直に感じられる。

表1：『ラジオのまなざし』基本構成

OP ナレーション
東日本大震災で甚大な被害を受けたいわき市。今なお様々な分野で大変なご苦労をされている方がいます。震災を乗り越えようと奮起されている方々は、何を生み出し、復興への架け橋へとつなげていくのか。この番組では今と未来にクローズアップし、後世に記録として残すべく、復興へ立ち上がる皆さんをご紹介します。
提供読み
「ラジオのまなざし ○○○○(回ごとにタイトル変う)」 この番組は、～～～の提供でお送りします。
インタビュー 前フリ
インタビュー(1)
JMUSICJ
インタビュー(2)
JMUSICJ
インタビュー(3)
JMUSICJ
インタビュー 後受け
提供読み
この番組は、～～～の提供でお送りしました。

例えば、2014年6月の放送は次のようだった。

大きなハウスが立ち並ぶ場所、可愛いいちごのイラストに導かれ、大野観光いちご園へ車を走らせませす。〈今回は取材でお邪魔するのですが、なぜでしょう、近づくにつれワクワクします。イチゴ狩りって楽しいですよ。四倉町(。)玉山にある、大野観光いちご園は、主に「章姫」「福はるか」「紅ほっぺ」などの品種を栽培しています。12月下旬から、6月上旬までは、イチゴ狩りが楽しめるほか、イチゴやトマトなどの直売も、行なっています。多くのお客様にお越し頂き、いつも笑顔で溢れていた、大野観光いちご園。でもあの日、東日本大震災が発生します。そして、ハウスや農作物などの被害だけではなく、原発事故による風評被害、安全安心の農作物を提供し続けるには、何をどうしたらいいのか。日々いろいろなことを考えながら、今も戦いは続いています。今日のこの時間は、大野水耕生産組合、代表理事の、大和田正幸さんにお話を伺いました。

配慮されたナレーションの後、番組名とその回を端的に表す短いコピーが読まれ、提供スポンサーの読みが入る。そして、明るいBGMに乗せて

パーソナリティのポジティブな口調でゲストが紹介される。パーソナリティによるゲスト紹介は、これからどのような話が始まるのかをリスナーに説明するもので、物語の導入として機能している。丁寧なナレーションから明るめのタイトルコール、そして物語の始まりのようなゲスト紹介へと、トーンを少しずつ変えながらメイントークに向かう。

#### 4.2 メイントーク

インタビューの導入後、メイントークが始まる。ゲストにより多少違いはあるが、およそ3つのパートに分けられる。典型的なパターンとして、導入部分でゲストの人物紹介と現在の活動説明、次のパートで、現在の活動までの経緯や動機が示されるが、この部分こそが震災経験の語りとなる。最後のパートでは、これから未来に向けた活動が話される。震災の語りが入るタイミングは、その時のゲストとの会話次第で変化するが、基本的な構成はほとんど変わらない。

以下では各パートの会話についてみていく。

##### 4.2.1 ゲスト紹介と現在の活動

インタビューの多くで、冒頭に収録場所の説明が行われた。パーソナリティが、今どこにいるのか、場所、景色、その場にあるもの、五感で感じることをリスナーに向けて話す。同じ地域のリスナーでも、その場所に行った経験がある・ない、場所を知っている・知らないなどの違いがあり、リスナーがその場所に対し、近しさや親しみを感じられるよう、個人の感情を交えながら声で描いていく。例えば、いちご園の放送では紹介後に以下の会話がなされた。

P: 四倉町にあります、大野観光いちご園に、お邪魔しています。ここに来る途中はも田んぼ道ですよ。両脇はもうあの::田植えが終わったばかりの田んぼが、一番綺麗なだなあ::と思いますね::、水面も風に揺れててちっちゃい苗がね::なんか上に伸びようとしてるあの感じがすごい好きですね::。くそしてこの大野観光いちご園、先ほどから本当にひっきり

なしにお客さんが来てます。トマトとかイチゴを大量に買求  
めてる人が多いんですけども↑、お話を伺いますのは、  
農事組合法人、大野水耕生産組合( )代表理事の↑大和  
田正幸さんです。よろしくお願ひします。ここ、ツバメの巢も  
あるんですね。

G: 入り口にツバメが♀食ってしまったんですよ:(h)¥.hh忙しい  
ですね:、¥子育て中ですので(h)¥。

P: ¥はははは(h) ¥ツバメの巢があるのはいいことだって聞きま  
すけどね。すごく春だなと実感しながら、く我々は:外  
に置いてある、テーブルと:椅子。くこの木でできたね! ¥ふ  
ふふ(h)¥そこに、腰掛けながら、お日様をサンサンに浴び  
て:お話( )伺っております。いろいろ聞きたいことは山ほど  
あるんですけども↑実は私もね、家族でよくこの大野観光  
いちご園さんにお邪魔して、↑ハガキが届くじゃないです  
か、あのハガキは:割引券( )になってる んです[よね。

(P = パーソナリティ / G = ゲスト)

実際、パーソナリティとゲストとの会話はこの  
ように始まる。会話はパーソナリティ (ベティ)  
の質問にゲストが応え、それにベティが応答する  
という順番で繰り返される。パーソナリティは質  
問の前に説明が入った発話をすることが多い。ゲ  
ストとパーソナリティの一連の応答は、両者の関  
係を示し、以前からの知り合いか、取材経験があ  
るか、活動に関心があったかなど、二人の関係性  
が分かるものである。

ベティは最初から明るく気取らない調子で話し  
かけ、ゲストも比較的リラックスしたモードでこ  
れに答える。パーソナリティが笑いや笑顔を交え  
ることは、ゲストにもそれが許されていることを  
示しており、ゲストも最初からユーモアや笑いを  
交えた応答をしているケースが多い。活動紹介も  
パーソナリティとゲストの応答には相づちや笑  
い、ツッコミのような割り込みが入り、重なりも  
多く、日常会話のようである。

次の例は、2015年9月放送された、いわき湯  
本温泉旅館の女将たちで結成された「湯の華会」  
がゲストの回だが、女将業や日常のこと、そして  
当時発表された「フラの街宣言」へと話が展開さ  
れていく。

P: いやでも:女性が元気なんだな:ってちょっと改めて思いま  
したけれども:、¥どうですか若松さん(h)¥?

G1: [そう]ですね:あの( )うん  
女性って、あまりこう何ていうかな、脳目も振らず、やっちゃ  
うじゃないですか[:。]=

P: [うん]

G1: そして、何か失敗したらお父さんが助けて[くれるわって]=

G2: [¥あはは(h)¥]

G1: =のがちよつと[どこかにあるんじゃない[かしら:。]

G2: [ありますあります] [ありますあります]

G3: [¥あははは(h)¥]

P: [え:なるほど]

P: え:、若松さんはあるんですか? =

G1: =いや:(h)、私は:ありますね。[¥あははははは(h)¥]

G2: [¥あはははははは(h)¥]

G3: [¥あはは(h)¥ 後ろに旅館]=

G3: =のあの、組合がついてる[し:] =

G1: [そうね] [あ:あ:]

G2: [ついで]

P: [あ:あ:あ:]

音楽を挟んだ後、女将達が着物でフラダンスを  
踊る取組みの経緯を話す。30秒程のスクリプト  
からも分かるが、お茶の間の会話のように笑い  
や割り込みが多く重なり、発話順も頻繁に交代して  
いる。

#### 4.2.2 震災の語り

ゲスト紹介や現在の活動について日常会話のよ  
うなトークが行われるが、どこかのタイミングで  
震災の語りへと転機していく。多くは、パーソ  
ナリティから質問を切り出すか、ゲストが震災につ  
いて発話したタイミングで関連のことを訊かれる  
かの、いずれかのパターンで始まる。例えば、先  
のいわき湯本温泉の女将の回では、活動の話の後  
に、竹内まりやの『輝く女性よ!』が掛かり、曲  
が終わると、パーソナリティは落ち着いた、また  
ゆっくりした口調で次のように訊き始めた。

着物でフラ、そしてフラのまち宣言をしました湯の華会( )ですが、  
実際、震災がありまして、その事実は( )あるわけで。そこから今5  
年目を迎えますけれども:、ちよつとその頃に記憶を戻してい

ただきたいんですけども。震災当日っていうのは皆さんはどうされてたんですか。小糸さんは。

ここでパーソナリティは、「記憶を戻す」という言葉を用い、また、「その事実はあるわけで。」「ただきたいんですけども。」と、言いさしを何度か用いている。このことから、震災を経験したゲストたちには「震災を語ること」への配慮をしていることが感じられる。配慮した言葉の後は、「震災当日はどうされていたんですか」との質問が投げかけられた。ゲストは、パーソナリティの話す間、微かに「うんうん」と相づちを打ちながらきいている。そして、パーソナリティから「○○さんは？」と問いを向けられた順番で、各ゲストは震災当日をどのように過ごしていたのかを描写していく。3人のゲストの話が一通り終わり、パーソナリティは、「けど」「けれども」を間や呼吸と共に使う。このような言いさしの言い回しを繰り返した後に、次のような質問を投げている。

まあその日はその：それぞれ皆さんね大変な思いをされたと思うんですけども、その日を超えたとしても、この5年目を迎えた今日、今日まで？色んなご苦労があったと思われるんですけど、.hh大変だった事って一言で聞くのは難しいんですけど、今心に残ってることっていうのは小糸さんはどんなことですか。

震災について話す時、ゲストは呼吸や間、言い淀みが多くなり、パーソナリティは微かな相づちや息遣いを入れてゲストの話をきいている。

G1: そうですね。大変だったこと(2.0)いや本当に一口では言えないですね。=

P: [いっぱいありますね]

G1: =<ですけども、あの：うちあの：14日にはもう社員をどうしようかと思ってハローワークに行ったのは覚えてますね。(1.0)[あの:]はい。

P: [14日]に。]

G1: =そしたらば、あ：まあまだその時は空いてたんですけども、これはどうしたらいいでしょうかつちゅうたら、ハローワークで失業給付をもらいな？さいど、いうふうに#:::#アドバイスしてください。

P: えっ、社員のこと。

G1: = # 社員のことを一番最初に # 考えましたね。う：ん( ) 社員の給料は払えないと：思いましたからね。とつさに。

P: すぐ判断しました？

G1: それは思いましたね。そしてあの：自分家のベランダから：夕焼けを見るとね↑、今でも涙：(2.0)=思い出しますね。=

P: [思い出す]

G1: =でも：自分だけ震災にあったわけじゃないからっていうのはh言い聞かせて。言い聞かせて：まあ(2.0)その時はいましたね。

P: 湯の華会で：集まれたのはだいぶあとですか？

パーソナリティはゲストの発話に対し、問いかけ、繰り返し、あるいはサポートのための相づちを打っている。前段の例のように、パーソナリティが「14日に」とやや強めにゲストの言葉を繰り返す局面では、災害発生から僅か3日目にこのような行動を起こしたことへの驚きの発話がみられた。当時の被災地の状況を知らなければ出ないリアクションである。

ゲストの発話を補う発話もみられる。例えば、ゲストがやや辛そうに「今でも涙」と言いよんだ時、パーソナリティは「思い出す」と言葉で補う発話を行い、ゲストはその言葉を繰り返すことで、発話が維持できた。

両者が共有する経験を提示することが新たな問いとなる場合もある。以下の例(2016年6月放送)は、パーソナリティと仲の良いフラダンス教師がゲストの回である。前半のハワイアン音楽が終わった後に、「でも休まざるを得なかった時期っていうのもありましたね？」とパーソナリティが新たに震災の話へ展開する。これはゲストがそのような時期を体験しているとパーソナリティが知っており、その話へ移そうとする意図が込められた発話である。

(音楽)

P: でも休まざるを得なかった時期っていうのもありました[ね: ?]

G: [ありましたね:::(h)] 震災の時ですよ [ね: :::::]

P: [?: :::::] hhhhh “そう私の職業もそうですけども、その生

きるということに直結しない職業[である]ことは=  
 G:[うんうんうん]  
 P:=間違いなと思うんですけど、[ものを食べるとかね、=  
 G: [うんうんうん]  
 P:=そういうことではない[ので:]=  
 G:うん。  
 P:=だから一旦やっぱお休みをね。  
 G:はい。思い出して泣いちゃうんだよ、[=  
 P: [ね:]  
 G:=[また泣いちゃうんだよね、はは[はははは(h)=  
 P: [はははははは]  
 G:=二人でね:[いつもね、こないだも泣いちゃった  
 P: [そうなのね、いつもこの話すると2人で泣い  
 ちゃうの[ね(h)♀  
 G: [ね:]初のイベントが[:ベティちゃんと一  
 緒にね[:]=  
 P: [そうなんだよね:](h)  
 G:=でね:4月12[日]  
 P: [うん]、でした。  
 G:黒い涙を流しながら。  
 P:本当に、もうマスカラつけなきゃよかったって後悔したよ[ね  
 (h) うふふ。  
 G: [ね:](h) 私もアイラインとれちゃってね  
 P:本当に:東日本大震災の時は休まざるを得なかったっていう  
 状況に追い込まれたわけですけどもその時はもうすっぱり休  
 もう!って決めたんですか。

P:震災後::もちろん:あゆみ先生たちのグループも色んな所で  
 ね?踊って::みんなに元気を:それから福島も元気ですよっ  
 てこと伝えるに:色んなところ行ってたと思うんですけども、支  
 援の:こう嬉しさがあがたさっていうの<身にしみて>感じまし  
 たよね:。  
 G: hhh "#感じた...#" 本当にこれは.hhもう(.)本当はね?震災  
 なんてほんとやなことだし:>あっちゃいけないことだしなかつ  
 たらもっとよかったとか思う部分も<すごくあるんだけど>、震  
 災の(.)おかげで言ったら変だけど[、]=  
 P: [うん]  
 G:=これで:人のありがたみとか、[(.)]ほんとに改めて感じさ  
 せられたっていうかな、=  
 P: [はい]  
 G:=人間は一人では生きていけない。全然ね:遠くで会った  
 こともない人たち(.)行ったこともない土地(.)の人たちもこんな  
 に応援してくれててこんなに応援してくれるんだって。]=  
 P: [そうですね]  
 G:=でね、私がフラダンスやってる人ってわかってもどこの誰か  
 も(.)ね>正直会うの初めてででもこんなに.hh涙流して色々  
 や[ってくれる]抱きしめてくれるんだっていう(.)のはあ[って:  
 P: [う:::](h) [うん]  
 G:=震災直後は、ちょっと色々なこともま、噂があったじゃない  
 ですか?=  
 P: [うん]  
 G:=放射能の件で[は[ら、]=  
 P: [うんうん]

これに対し、ゲストは言いよどみ、間や長めの呼吸を取りながら震災当時を思い出し、言葉を選びながら話している。パーソナリティはおそらくその胸中を察し、互いに共有する思い出について、「あの時こうだったね」「ああだったね」と発話を交代しながら、ゲストの感情に寄り添った一連の応答を続けている。その上で、パーソナリティは、「東日本大震災の時は休まざるを得なかったっていう状況に追い込まれたわけですけどもその時はもうすっぱり休もう!って決めたんですか」と質問を切り出した。

それに続いて、パーソナリティは「身にしみて感じましたよね」と、互いに共有する感情について発話するが、これは新たな会話の契機となった。

パーソナリティはゲストの震災経験をある程度は知っており、場合によっては自身も同様の経験をしていることから、ゲストの話に「うん」「はい」といった相づちを打つことができ、必要に応じてフォローの発話が入る。

同様に、ゲストから「震災直後は、ちょっと色々なことも、ま、噂があったじゃないですか?」とパーソナリティへ問う発話が入れば、これが新たな発話へと繋がる。これはゲストがパーソナリティと同じ経験しているが、少なくとも理解していることを前提とするもので、新しい会話の契機となる。

次例のように、ゲストから「したじゃないですか」「〜とか」と、言いさしをとりながらパーソナリティに確認する発話もみられる。

G: =野菜持っていくと、やっぱ中にはね?みんながみんなじゃないけどほんとそこに1人が2人いると:ちょっと心折れるようなこと言われたりも:[したじゃないですか?]

P: [うん]

G: =放射能持って[くん]なとか:

P: [うん]

G: =じゃお前食べてみるとか:いや食べられますと[か]。h

P: [うん]

G: =こんなん持って何しに来てんだっとか言われたこともあったので、心折れかけて:お膳が後ろの方行っちゃって(h)¥[とか]=

P: [う:ん:]

G: =そんなこともすごく:あったんですよ:どうせ私たちが放射能を体の中から放射してんだろ[くらい]な言われてるくらいに:[とれち]やって、=

P: [うん]

G: =そんな(気持ちも)一瞬心も折れかけてる時に、:h熊本のね?:人にこう:(.)震災10日後に:こっちのいわきに入って、:瓦礫を片付けてくれてたボランティア会の(.)人たちが、:熊本で大きな復興支援のイベントやるっ、そこに:h募金箱を置いて:こう:復興支援のところに踊りに来て、:一緒にやろうって言うてくれて:

P: 福島のために:九州でやってくれるって事ですよね?:

G: はい、そうなんです[:]

P: すごいことですよ。

このような発話を続ける状況では、両者が風評被害について特定の感情を共有し、それを言える相手だからこそ成立する会話だという点が理解できる。

パーソナリティはトーンや長さを変えながらゲストの発話をサポートし、最後に、ゲストの考えや活動に対して、「すごいことですよ」と評価的な相づちを打つ。

#### 4.2.3 未来の語り

震災経験から未来の活動や思いへと話が展開される中で、特に音楽挿入が強制的に発話を変えたり、震災経験を現在へ接続させたりするタイミングとなっていた。また、配慮的な相づちから評価的な相づちに変えることもトランジッションの契機となっており、パーソナリティがそれを意識的

に展開する様子がみられた。

P: いわきに住んでみて(h)今はどうですか?

G: いや:::いいですね。=

P: あ:::ほんとですか?

G: =なんか色々ね::報道とか巷ではあるみたいですけど:(h)私は全くそういうの無い。みんなによくしてもらって、いわきの知り合いも::徐々にですけどhhh 増えてきて。

P: お客様は::やっぱり::富岡の繋がりが[多い]ですか? ]

G: [あ:あ:そうですよね。元々のお客さんと双葉郡の人で避難している方でこの辺に住んでる方がなんか双葉郡のこんな人が店やってるよっていう噂聞いてきてくれる人が半分ぐらい[ですかね。]=

P: [う::んうんうん。]

G: あとはいわきのお客さんで半分ぐらいの(h)ちよほど半分半分[ぐらいですね。]そんな感じでやってます。

P: [うんうんうん。]

P: 近くの方まで来ていただけるとね:::だんだん地元でこう:::いわきに馴染んで馴染んで(1.0)[¥あはははは(h)¥

G: [¥そうなんと富岡に]帰れなっていうの[はもう。]¥

P: [¥あはは(h)¥] ¥いやいやいや2店舗目で¥hhhうふふふ(h)

G: 娘次第ですね。¥それは将来の楽しみにとっておきます。¥

上記の2018年3月の放送は、双葉郡富岡町の元理容店店主が原発事故で避難し、最終的にいわき市で店を再開した話だった。震災の語りの後、パーソナリティは富岡町の帰還困難指示は2017年4月に一部を除き解除されたが、実際に帰還は簡単ではなかったことを話す。このような状況下でも、笑いやユーモアを交えた会話へと展開させて、番組冒頭のポジティブで明るい発話へと変えようとしていた。

多くの放送回で同様のパターンが繰り返されており、震災の話から現在に戻り、そして未来へと会話を繋いでいたのである。

## 5 考察

本研究では、コミュニティ放送の震災の語りがどのように生成されているのかという問いをもと

に、FMいわきの復興番組『ラジオのまなざし』を対象に、パーソナリティとゲストとのトークを会話分析した。ここでは、分析結果をもとに、研究課題に沿って考察する。

まず、研究課題 (RQ1) に関しては、主に以下の相互行為によるトークの構造化が観察された。

(1) 発話順：パーソナリティが質問し、ゲストが応える順を基本とするが、現在や未来に関するトークでは笑いや割り込みが多く、重複や発話交代が頻繁に起き、質問/回答の形が崩れることもあった。震災の語り部分では、相づち以外に発話の重複は少なく、基本形を崩さないが、両者が共有する経験や感情を持ち込んだときには発話の交代も起きていた。

(2) 相づち：全般的にパーソナリティによる「うん」というサポートが多く、現在や未来に関するトークでは強調や長さ、繰り返しによるバリエーションが多い。一方、震災の語りでは、傾聴やシンパシーを表わす微かな声での相づちに変わっていた。また、ゲストの活動や考えに対しては、評価的な相づちが入る。震災の語りでは、ゲストの発話を補ない、発話を維持させるような補助的な相づちが入ることもあった。

(3) 言いさし：震災のトークではゲストに配慮した言いさしが多い。特に、震災に関する質問を投げかけるときは、言いさしを多用した前置きがあってから質問となることが多い。ゲストも、震災の経験を語る際、いい淀み的な言いさしが多くなった。

このように、一連の会話でありながら、現在と未来、そして震災とでは、同じ相づちや言いさしでも異なる意味で用いられている。特に、震災について話す時は、ゲストへの配慮や同じ災害経験者としての共感の意味が強まる。

また、パーソナリティがリスナーに向けたトークとしては、以下の特徴が挙げられる。

- ・地元のリスナーへのシンパシーを表現
- ・挨拶時における関係性の強調
- ・トークが行われる場所の詳細説明
- ・取材先を被災地としてではなく、魅力的な地域として描写

次に、研究課題 (RQ2) の、ゲスト (語り手) とパーソナリティ (聞き手) との近接性についてだが、トークにおける発言の理解として、(1) 震災の経験、(2) 復興活動の実践、(3) いわきや福島への想い、という3点が浮き彫りになった。これらはゲストが番組で安心して自分の震災経験、思いや考えを語る上で重要な前提となる。また、このような近接性をもって、パーソナリティはゲストのトークを主体的にきき、応答する。場合によってはパーソナリティ自身が語り手となることもある。つまり、語り手と聞き手の間で役割は分かれているが、会話へのコミットメントはどちらもが主体的な関わりを維持しているのである。

研究課題 (RQ3) の、リスナーがいかにトークの生成に関係しているかについて考察する。ゲストは農家や漁業従事者、商店主、まちづくり関係者、学生、復興プロジェクト関係者、アーティストなど地域に根ざし、日常を送っている人たちであり、被災しながらも、そこから苦難を乗り越え、復興を目指す活動について語る彼らの物語は、特別な復興物語ではなく、被災地の住民にとって日常的に耳にする被災者のストーリーである。したがって、被災地のリスナーも、ゲストやパーソナリティと同様の近接性を有しており、トークを主体的にきいていると考えられる。研究課題 (RQ1) で示したリスナーに向けたトークの特徴は、そのようなリスナーの存在を意識した結果であり、パーソナリティのトークの生成において地元リスナーの存在が影響していることが理解される。

## 6 おわりに

本研究では、コミュニティ放送での災害の語りがパーソナリティとゲストとの相互行為によってどのように生成されるかを会話分析から明らかにしようとした。分析対象の復興番組『ラジオのまなざし』に登場したゲストには、福島第一原発事故の被災者たちも多くおり、地元コミュニティ放送以外では語りにくい複雑な心境や辛さ、それを乗り越えた現在などがパーソナリティと相互作用しながら、一つのトークとして展開されていく様子が分析から浮かび上がった。

分析を通して理解されるのは、コミュニティ放送を通して災害を語ることは、単にゲストの災害経験を放送することではないという点である。それは、被災した地域の人たちが、安心して語れる環境の中で、同じ被災経験をもつパーソナリティとの相互行為を通して、被災や復興の経験、複雑な想いや感情を、その時その場で共に紡いでいく行為であり、それを一つの物語として同じ体験や感情をもつ地元のリスナーと共有していくという、もう一つの行為であり、コミュニティ放送という場で二つの行為が実践されていることなのである。

本研究は、これまで被災地のコミュニティ放送において、被災者の思いや体験は伝えられるべきものとの考えを前提に積み重ねられてきた実践に注目し、被災地のコミュニティ放送におけるメディア・コミュニケーションの前提とは何か、その前提のもとで被災者同士が災害を語るという相互行為がどのように理解できるか、そしてそこから生成された語りとは何かについて考察し、新たな知見を示すことができた。また、新たな分析の枠組みを示したことに本研究の意義がある。

自然災害のリスクがますます高まり、災害の記憶の継承が一層求められる社会において、災害の記憶を語る多様な災害復興番組について、また台風や水害など異なる種類の災害の語りを対象とし

て、継続的に分析調査し、知見を積み重ねていくことで、理解を一層深めていく必要があるだろう。

### 注

- (1) レジリエンスは困難な問題や危機的状況、ストレスに遭遇しても、潰れず適応していく能力や適応していく過程を意味する。
- (2) 心理療法やカウンセリングにおいて、自らの内面を言語化することを主な治療手段とし、自己体験や感情を話すことで表現する。
- (3) 「言いさし」は、例えば、「使えなかったんですけど」のように、最後まで言い切らなくても意味が伝わる表現を意味する。
- (4) トランスクリプションでは、好井らの『会話分析への招待』やHutchbyの*Media Talk-Conversation Analysis and the Study of Broadcasting*を参照した。
- (5) 『3. 11から震災特別番組』は、尺、構成、内容が度々変更され、ゲストにも偏りがあった。『復興のつち音』は、トーク全体の尺は20分程度と短いため、パーソナリティとゲストのやりとり（相互行為）は30セット程度と少なかった。
- (6) 『ラジオのまなざし』に関しては、殆どの放送が保存されており、FMいわきから全ての音源を提供頂いた。

### 参考文献

- 荒畑翼/寺岡丈博/榎本美香 (2017) 「オープンコミュニケーションとしてのラジオトークに見られる重複発話現象の解析」情報処理学会第79回全国大会公演論文集 pp.1009-1010.
- 稲垣暁 (2017) 「沖縄でソーシャルワーク機能を果たすコミュニティFM」松浦さと子編著『日本のコミュニティ放送：理想と現実の間で』晃洋書房 pp.94-105.
- 大内齊之 (2018) 『臨時災害放送局というメディア』青弓社.

- 小川博司 (2009) 「ラジオは衰退していくメディアなのか—複数のラジオの時代の『参加型コミュニケーション』をめぐって」『マスコミュニケーション研究』74, pp.31-44.
- 樫村志郎 (1996) 「会話分析の課題と方法」*The Japanese Journal of Experimental Social Psychology* 36(1), pp.148-159.
- (2001) 「震災報道の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社 pp.148-172.
- 金山智子/小川明子 (2020) 「Collective Memories of Disaster through Community Radio—A Case Study of the Great East Japan Earthquake」『情報通信学会誌』38(2), pp.67-80.
- 金山智子 (2021) 「災後・災間におけるコミュニティ放送による記憶の継承」『社会情報学』9(2), pp.19-35.
- 災害とコミュニティラジオ研究会編 (2014) 『小さなラジオ局とコミュニティの再生—3. 11から962日の記録』大隅書店.
- 竹山昭子 (2002) 『ラジオの時代—ラジオは茶の間の主役だった—』世界思想社.
- 能智正博 (2006) 「“語り”と“ナラティブ”のあいだ」能智正博編『〈語り〉と出会う—質的研究の新たな展開に向けて—』ミネルヴァ書房 pp.11-72.
- 藤竹暁 (2009) 「ラジオは人間の鼓動を伝える」『マスコミュニケーション研究』74, pp.65-74.
- 南保輔 (2000) 「ラジオ野球中継の産出資源」『コミュニケーション紀要』13, pp.51-89.
- 結城俊哉 (2014) 「被災当事者の「生活経験の語り」に関するレジリエンスの構成要件の検討～東日本大地震の被災者S氏の「語り」の記録を手がかりとして～」『立教大学コミュニティ福祉研究所紀要』2, pp.95-113.
- 好井裕明 (2001) 「制度的状況の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社pp.36-70.
- 鷺田清一 (2016) 「〈語り〉の生成」せんだいメディアテーク監修『物語りのかたち』grambooks pp.180-87.
- Burgess, J. (2006) Hearing Ordinary Voices : Cultural Studies, Vernacular Creativity and Digital Storytelling, *Continuum*, 20(2), pp.201-14.
- Giddens, A. (1987) *Social Theory and Modern Sociology*. Cambridge: Polity Press.
- Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press.
- Hutchby, I. (2003) Conversation Analysis and the Study of Broadcast Talk, In R. Sanders and K. Fitch (eds.), *Handbook of Language and Social Interaction* Mahwah NJ: Lawrence Erlbaum Associates pp.437-67.
- Hutchby, I. (2006) *Media Talk-Conversation Analysis and the Study of Broadcasting*, Berkshire: Open University Press.
- Montgomery, M. (1986) DJ Talk. *Media, Culture and Society*, 8(4), pp.421-440.
- Ong, W.J. (1982=1997) *Orality and Literacy-The Technologizing of the Word* (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店).
- Raphael, B. (1986=1995) *When Disaster Strikes-How Individuals and Communities Cope with Catastrophe*, New York: Basic Books (石丸正訳『災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学』みすず書房).
- Scannell, P. (1989) Public service broadcasting and public life. *Media, Culture and Society*, 11, pp.135-66.
- Scannell, P. (1991) Introduction: The Relevance of Talk, In Paddy Scannell (ed.), *Broadcast Talk*. London: Sage pp.1-13.
- Stachyra, G. (2014) The obligations of listeners

- in 'expression-seeking' radio dialogues. *Radio: The Resilient Medium* pp.125-38.
- Tolson, A. (2006) *Media Talk: Spoken Discourse on TV and Radio*, Edinburgh: Edinburgh.
- Van Vuuren, K. (2006) Community Broadcasting and the Enclosure of the Public Sphere. *Media Culture and Society*, 28(3), pp.379-92.